

# 狭衣物語卷四飛鳥井女君詠二一首における異文

— 諸本間の異同と本文の解釈 —

須藤 圭

— はじめに

狭衣が即位し、まもなく、宰相中将妹君（式部卿宮姫君とも称される）は藤壺女御となり立后する。狭衣の源氏宮や女二宮に寄せる想いは途絶えることなく続き、物語も終わりを迎えようとする折、亡き飛鳥井女君のゆかりの品が娘である飛鳥井姫君のもとに届けられる。狭衣もまた、このゆかりの品を手にする。それは、飛鳥井女君自身が描き集めた絵日記であり、多くの和歌が記されていた。

またあまになり給けるにも、いひちきり給しことも、まつ  
思出られ給て、いみしうない給へるところに、  
をくれしとちきらさりせはいまはとてそむくもなにかか  
なしからまし  
うせ給はんとしけるほとちかうなりてなるへし。

なからへてあらはあふよまつへきにいのちはつきぬ人  
はとひこす

きえはて、けふりは空にかすむとも雲のけしきをそれと  
しらしな

とあるを御らんしはつるまゝに、さくりもよ、とかや。みた  
りかはしきなみたのけしきを、中将かちかうてきくらんこと  
も、あまり心よはきやうなれはおほしつ、めと、なくよりほ  
かのことなし。

かすめよなおもひきえなむけふりにもたちをくれてはく  
ゆらさらまし

おちたきるなみたのみをははやけれとすきにしかたにか  
へりやはする

などかきつ、けさせ給ても、返々かひなうおほしめさる、こ  
とかきりなれば、

（参考 大系四六〇頁―四六一頁・集成下三六四頁―三六五頁）

絵日記には、狭衣が通うようになったことから、筑紫へ下向したことや常盤に移ったこと、飛鳥井姫君を一品宮に渡すときの様子などが克明に描かれており、狭衣との契りを思い出しながら詠んだ和歌も記されていた。それらを見て、狭衣が返歌する一場面である。三谷榮一氏が第一系統と分類する内閣文庫本から引用した。次に、第二系統とする九条家旧蔵本を挙げたい。

又あまに成給けるにも、いひ契給ひし思ひ出られ給ふ所に、  
おくれじと契らざりせばいまはとてそむくもなにかかな  
しからまし

うせ給はんとての程ちかくなるべし。

きえはて、煙は空にかすむとも雲のけしきはそれとしら  
じな

ながらへてあらばあふせを待べきに命はつきぬ人はとひ  
こず

など有を御らんじつゝくるまゝに、さくりもよ、とかや、み  
だれがましき涙のけしきを、中将ちかくてき、し、あまり心よ  
わきやうなりとおぼしつゝ、めども、なくより外の事なし。

かすめよな思ひきえなん煙にもたちをくれてはくゆるらざ  
らまし

大方になみだのを見をははやけれど過にし方はかへりやは  
する

(な)どかきつけさせ給て、返くかひなくおぼしめさるゝこ

とかぎりなし。

内閣文庫本と比べると、九条家旧蔵本では助詞などの異同が多いことはもちろんであるが、「なからへて」歌と「きえはてて」歌の順序が逆になっていることを大きな違いとして指摘できる。第三系統とする蓮空本はどうなのであろうか。

又あまになり給ひけるときに、いひちぎり給し事もまづ思  
いでられ給て、いみじくなき給へるところにて、  
をくれじとちぎらざりせばいまはとてそむくもなにかか

なしからまし

うせ給はんとての程ちかくなりてなるべし。

ながらへてあらばあふせをまつべきに命はつきぬ人はと  
ひこず

きえはて、煙は空にかすむとも雲のけしきはそれとしら  
まし

とあるを御らんじはつるまゝに、さくりもらしとかや。みだ  
りがはしき御涙のけしきを、宰相めちかくてきらんもほの  
事なし。

かすめよ思ひきえなん煙にもたちをくれてはくゆるざら  
まし

おちとまる涙のを見をははやけれどすぎにしかたへかへり  
やはする

など、かきつけさせ給ても、返々かひなくおぼしめす事かぎりなければ、

蓮空本では、内閣文庫本にある「あまり心よはきやうなればおほしつ、めと」辺りが省略されている。内閣文庫本が、中将（宰相）が近くにいるからあまりにも心が弱いように思われてしまうので泣くことは思いとどまるけれども、それでも涙を流さずにはいられない、としているところを、蓮空本は、中将（宰相）が近くにいるから泣くに泣けないけれども、と展開させているのである。後者の場合、読者には中将（宰相）が近くにいることしか分からず、狭衣の心中がいかなるものであったか、自分の弱さを表出することに抵抗があるとも、飛鳥井姫君の女房であり飛鳥井女君の従姉妹でもあつて同じく悲しみに暮れる中将（宰相）の前であることを気にしているとも考えられ、解釈にいくつかの余地を生じさせている。この省略が有効に機能しているかどうかは疑問であるが、意図した改変と受けとられよう。

ところが、先に挙げた内閣文庫本と同じ第一系統に分類される流布本には、大きく異なる点が存在する。流布本の代表として承応三年版本を見てみたい。

又あまに成給ひにけるにも、いひちぎり給ひし事共先思ひ出られ給ひて、いみじうなき給へるところに、  
をくれじとちぎらざりせば今はとてそむくも何かかなし

からまし

とあるを御らんし出るまゝに、さくりもよ、とかや。みだれかはしき涙のけしきを、中将がちかくて聞らん事もあまり心よはきやうなりとおぼしつ、めど、なくよりほかの事なし。  
かすめよなおもひきえなんけふりにも立をくれてはくゆるならまし

おちたぎつなみたのみほははやけれと過にしかたに帰り  
やはする

などかきつけさせ給ひても、返々かひなくおぼしめさる、事かぎりなければ、

前掲の内閣文庫本や九条家旧蔵本、蓮空本と比較すれば、「なからへて」「きえはてて」の二首を欠いていることにとりわけて注目できよう。

第一系統から第三系統、流布本の本文を見てきたが、すなわち、「なからへて」「きえはてて」の二首には、内閣文庫本に比して、九条家旧蔵本では順序が異なり、承応三年版本では二首がともに記されていないように、諸本に応じて多様なあり方を垣間見ることができるのである。そこで、本稿では、諸本におけるこれら二首の異文をとり上げて、順序の相違や欠落が意識的なものであるか、あるいは無意識的な誤りかを見定めてみたい。結論のみを述べてしまえば、これらは故意になされたものであり、また、特に二首の欠落に限っては、紹巴による本文校訂の結果と考えら

れる。紹巴の存在が流布本の成立に深くかわつてゐることはすでに指摘されているが、特定の場面における具体的な方法を探ることで、流布本に至る一過程を明らかにするばかりでなく、紹巴が狭衣物語をどのように読もうとしてきたかについても詳らかにしていこうと思う。

## 二 二首を有する本文

前掲した内閣文庫本を参照しつつ、絵日記の内容を見ておきたい。どのような絵が描かれていたかは分からないが、出家した折、飛鳥井女君は「をくれし」と詠み、死に後れることがないように狭衣と約束していなければ出家したとしても悲しいことがあろうか、と書いている。その後、場面は転換し、亡くなる直前の詠歌であろうか、「なからへて」「きえはてて」と続けて書かれ、前者は亡くなる時になつても狭衣は尋ねてこないといひ、後者は火葬の煙を見ても狭衣はそれと知らないだろうといひ。どちらも、狭衣への名残が詠みこまれながら、飛鳥井女君の悲しみを表出させた和歌といふことができる。

ところで、後者の「きえはてて」歌は、巻三、狭衣が詠んだ次の和歌と偶然にも響きあう。内閣文庫本から引く。

なき人のけふりはそれと見えねともなへて雲あのみつかしき  
かな

(参考 大系二四二頁・集成下四十三頁)

飛鳥井女君が入水をはかったものの救い出され、やがて、常盤で亡くなったことを聞いた狭衣はその地へと向かう。そこで狭衣は、亡くなった飛鳥井女君を火葬した煙が一体どれか見分けられなかった、と詠んでいる。絵日記にあるとおり、飛鳥井女君が亡くなる直前に、私の火葬の煙を見てもきつと分らないだろう、と詠んだことを思えば、この二首はまるで贈答歌のように一対になつてゐるといふべき。

自身の詠んだ和歌とはからずも贈答歌になつてしまつていたことを、狭衣は気づいていたのであろうか。それが語られることはないが、絵日記に記された飛鳥井女君の和歌に「かすめよな」と返歌し、飛鳥井女君の火葬の煙に霞んでくれるように詠みかけ、私も煙となつて後れずにたなびきたいと答えている。絵日記を介して、はるかに時間を隔てながらも、和歌の贈答を成立させているのである。さらに、狭衣は「おちたさる」ともう一首を加えて詠む。この一首は飛鳥井女君の詠歌に対応してはいないものの、飛鳥井女君と過ごすことのできた過去に戻ることは決してできないのだ、と悲痛の思いを詠つたものである。

さて、問題の所在は「なからへて」「きえはてて」の二首についてであつた。これらが収められていることについて述べれば、本文の読解に何ら問題は生じないどころか、後の狭衣の詠歌と一対の贈答を形成するこのあり方こそ、もつとも適切であるといつ

てよい。諸本を見渡しても、二首を取めるかたちをとるものが多く、通行のものとなしうる。そのため、底本に内閣文庫本を用いる日本古典文学大系や、同じく「なからへて」「きえはてて」歌を取める平瀬本を用いる新編日本古典文学全集では、これら二首に関して他本の様相が注記されることはないのである。

### 三 二首の順序が相違する本文

ところが、先に引用した九条家旧蔵本では、「なからへて」「きえはてて」の順序が内閣文庫本とは逆になっている。九条家旧蔵本と極めて近い本文をもつ伝為秀筆本も同様であり、他に文禄本も逆順とする。この相違について、源氏狭衣百番歌合が六十七番歌に「なからへて」、六十八番歌に「きえはてて」の順に採っていることから、九条家旧蔵本の順序を誤りと捉える向きもあるが、九条家旧蔵本のあり方が誤りであるか否かを判断するためには、その解釈を考えていかなければならない。つまり、九条家旧蔵本の順序が源氏狭衣百番歌合の依拠本文になった一本と異なっていることは証しうるとしても、順序の入れ替えが意図的であったかどうかは明らかにしえないのである。九条家旧蔵本の解釈にふれたものに、一文字昭子氏「伝為明筆本『狭衣』の諸本における位置―和歌からの視点―」があり、次のようにいう。

九条家旧蔵本の場合、歌の内容をみるとならんらかの錯誤によ

って位置が逆転したといつてよいと思われる。つまり、命をながらえることができるならあなたを待つことができるのに、その命はつきようとしている。そして待っているあなたもまたたずねてこないということに続いて、命がなくなつて、私が煙となってそらにかすんでしまつても空に浮かぶ雲をみて私を思つて欲しい、となるのが、妥当であつて、この順番が逆になるのは、不自然な感を否めない。

和歌の内容を検討し、逆順となる本文を誤りと見なしている。確かに、「なからへて」歌は死を目前にしたときの心中が詠われているのに対し、「きえはてて」歌は死後の望みを詠っているのであつて、順序が入れ替わることに違和感は生じよう。

ところで、同じように連作にして和歌が描かれることは、狭衣物語にいくつか存在し、その中で、諸本によつて順序の異なるものがある。巻三に描かれる女二宮のすさび書きの詠歌である。九条家旧蔵本を見る。

宮つくづくおほし出る事おほかり。中にこの末こす風のけしきは、過にしその比もかやうにや、とすこし御めとまらぬにしもあらぬに、かの宮わたりのぬれごろも、まことしう、世にきこゆればあひなうあわれに思ひきこえ給て、筆のつゝあでのすさびに、やがて此文のかたわらに、

夢かよよみしにもにたるつらさ哉うきはたくひもあらじ

と思ふに

おきふしわぶると有かたわらに、

下萩の露きえわびしよなくもとふべき物とまたれやは

せし

身にしみて秋はしりにき萩原やすそこす風の音ならねども

などをなじうへにかきけがさせ給て、こまやかに引やりて、

(参考 大系二七二頁・集成下八十七頁)

女二宮への想いが尽きない狭衣は、一品宮との望まない縁談が進んでいよいよ婚儀の日どりも決まったころ、「おれかへりをきふしわぶる下萩のすそ風を人のとへかし」(参考 大系二七〇頁・集成下八十五頁)と詠みかける。女二宮は返事をするつもりはなく、狭衣からの消息の脇に「夢かとよ」、そして「下萩の」[身にしみて]と書きつけるのである。次に、和歌の順序に留意しながら、内閣文庫本を示してみよう。

宮つくくとおほしいつることおほかるなかに、このすそこす風のけしきは、すきにしよるの心もかやうにてや、とすこし御めと、まらぬにしもあらで、ふてのついですさひに、この御文のかたはしに、

夢かとよみしにもにたるつらさかなうきはためしもあらしと思ふに

おきふしわふるとあるかたはしに、

身にしみて秋はしりにきおきはらすそこすかせのをと

ならねとも

又、

した萩のつゆきえわびしよなくもとふへき物とまたれやはせし

などおなじうへにかきけがさせ、こまやかにやかてやり給。

後の二首が逆順になり、「身にしみて」「した萩の」となっていることが知られよう。両者ともに狭衣が詠んだ「おきふしわふる」に対する詠歌であるが、「身にしみて」歌は、萩原の風の音になぞらえて、あなたに見捨てられた私の身には染みこむように秋のつらさが感じられたのだという。また、「下萩の(した萩の)」歌は、下萩(萩)の露にたとえ、今にも命が消えそうな夜でさえもあなたの訪れを待つようなことは一度もなかったのだ、と悲しみに暮れていた日々における狭衣の冷淡な対応に反発して、従って、どちらも狭衣への激しい恨みを詠みこんでいると捉えられるのである。しかし、ここであえて、どちらの和歌が先に詠まれるべきかを考えると、「下萩の(した萩の)」とかつてのつらい日々を思い出し、そうした日々を過ごしてきた結果として「身にしみて」と詠むべきではないだろうか。両者は、全く同じ態度で詠まれているとは思えないのである。また、「身にしみて」歌には諸本によって異同がある。承応三年版本には「うき身

には秋もしらる、おぎはらやすゑこそ風のをとならねども」と見え、あなたのせいで心を悩ます身となった私は秋のつらさでさえも自然と知られるのだ、と詠んでいる。より明らかに現在の境遇を語っており、「下萩の（した萩の）」と過去を回想して詠む姿からはいつその隔たりが見いだされてこよう。「身にしみて」歌がこうした異文を発生させる要素をはらんでいたことに、改めて留意しておく必要がある。それにもかかわらず、内閣文庫本はこれら二首を「又」と併記して区別せず、「身にしみて」「した萩の」の順に示している。すなわち、内閣文庫本では、右に述べたような論理で和歌を排列してはいないのである。

従って、「きえはてて」「なからへて」の順とする九条家旧蔵本もまた、書写者や享受者にとつて誤りであつたかどうかはなお慎重に考察していかなければなるまい。

#### 四 二首を欠く本文

さて、この「なからへて」「きえはてて」の二首について、もつとも大きな問題をほらむのは、二首をともに欠く承応三年版本などの流布本である。諸注釈書を眺めてみると、たとえば、底本に「なからへて」「きえはてて」の二首を取めない元和九年古活字本を用いている日本古典全書や旧東京教育大学国語国文学研究室蔵本を用いる新潮日本古典集成は誤りと認め、注記を付して二首を補っている。後者では、「なからへて」歌が源氏狭衣百番歌

合と風葉和歌集に、「きえはてて」歌が風葉和歌集にとられてい  
ることを傍証として挙げてもいる。述べられているとおり、源氏  
狭衣百番歌合や風葉和歌集の依拠した鎌倉期に受容されていた一  
本に、これら二首が所収されていたことは間違ひなからう。しか  
しながら、このことは受容の過程で発生した異本にとつて誤りと  
判断する根拠として認められるのであろうか。九条家旧蔵本を考  
察した際の再述になるが、流布本が誤つて脱したかどうかは、源  
氏狭衣百番歌合や風葉和歌集の本文とは全く別に熟慮されなけ  
ばならない問題といえる。こうした点をふまえてか、近年の研究  
では一方的に誤りと断じることはないようである。久下裕利氏  
『狭衣物語』作中歌の形態について<sup>12</sup>は誤脱であると結論づけて  
はいるものの、意図的な削除を視野に入れ、どちらか「割り切れ  
ない箇所」とも述べている。前掲一文字氏論考でも単なる誤りと  
してだけではなく、故意に省略した可能性を疑っている。さら  
に、中城さと子氏は、『流布本狭衣物語と下紐の研究』第一章第  
一節三「里村本『狭衣物語』の成立過程<sup>13</sup>」において、紹巴が「大  
胆に刈り込み」、「なからへて」「きえはてて」歌を欠く「先鞭を  
付けた」と見なしている。

稿者も中城氏と同様、紹巴が意図的に「なからへて」「きえは  
てて」の二首を削除した本文を作りあげたと考えている。そこ  
で、承応三年版本などの流布本の成立に至る間にあつた、いわゆ  
る紹巴本と称される、紹巴の関与が認められる伝本をいくつかと  
り上げ、本文が流動するなどの段階において二首の欠落・削除が生

じたかを確認しておこう。大阪天満宮御文庫の所蔵になる紹巴による加証奥書をもつ一本（以下、元斎本）は、元斎が紹巴所持本を写したものであることが知られており、まずはこの本文を引用する。

又あまになり給にけるにも、いひ契給ひしこと、もまつ思ひ  
いてられ給て、いみしうなき給へる所に、

をくれしとちきらさりせはいまはとてそむくもなにかか  
なしからまし

とあるを御らむしはつるま、に、さくりもよ、とかや。みた  
れかはしき涙のけしきを、中将かちかくてきくらむ事も、あ  
まり心よはきやうなりとおほしつ、めと、なくより外のこと  
なし。

かすめよな思ひきえなんけふりにもたちをくれてはくゆ  
らさらまし

おちたきる涙のみおははやけれとすきにしかたにかへり  
やはする

などかきつ、けさせ給ても、返／＼かひなくおほしめさる、  
事かきりなければ、

元斎本は流布本に極めて近いのであるが、ここでも、二首を欠  
いていることに留意したい。次に、やはり、紹巴が用いた諸本の  
ひとつとして認められる実践女子大学附属図書館常磐松文庫に所

蔵される一本（以下、祐範本）を挙げてみたい。

又あまになり給けるにも、いひちきり給ひし事ともまつ思ひ  
いてられ給て、いみしうないたまへる所に、

をくれしとちきらさりせはいまはとてそむくもなにかか  
なしからまし

うせ給はんしけるほとちかうなりてなるへし。

なからへてあらはあふよをまつへきにいのちはつきぬ人  
はとひこす

きえはて、けふりは空にかすむとも雲のけしきをそれと  
しらしな

などあるを御らんしはつるま、に、さくりもよ、とかや。み  
たりかはしき涙のけしきを、中将かちかくてきくらん事も、  
あまり心よはきやうなりとおほしつ、めと、なくよりほかの  
事なし

かすめよな思ひきえなんけふりにもたちをくれてはくゆ  
らさらまし

おちたきる涙のみおははやけれとすきにしかたにかへり  
やはする

などかきつ、けさせ給て、返／＼かなしうおほしめさる、事  
かきりなければ、

元斎本と異なり、祐範本は二首を有している。すなわち、元斎

本も祐範本も、ともに紹巴が用いた諸本でありながらも、一方は二首を欠き、他方は二首を有しているのである。また、前掲中城氏の調査でも指摘されていたことが、私の調査に限っても、紹巴の関与が認められない諸本で二首を欠く本文をもつものはない。従つて、紹巴は二首を有する本文を手にしていないながらも、あえて、二首を欠く本文に校訂を行った可能性が疑われてくるのである。

ところで、紹巴は狭衣物語の本文校訂を行うとともに、注釈を加え、狭衣下紐を残している。後代、猪苗代兼寿がこれを参考に狭衣物語抄を著し、また、その作成にあたって用いられた書き入れ本も現存しており、参照しておきたい。なお、この兼寿書き入れ本と認定される伝本はいくつか知られているが、本稿では、兼寿による転写本ともいわれる天理大学附属天理図書館蔵本を用いる。狭衣物語抄と、草稿ともいふべき兼寿書き入れ本の存在は、兼寿の注釈作業の内実を知る上で貴重な資料になると考えられている。

卷一、「音羽の山には」(参考 集成上二五頁)の箇所をとり上げてみる。兼寿書き入れ本では、次に挙げるとおり、「一すんにみてりとすへし也」と「一すんにみてり」を適當と判断しながらも、「音羽の山には」の本文に対しても注を付している。なお、「(一)」内は行間書き入れである。

音羽の山には「古今、山ナシノ音羽ノ山ノ音ニノミ人ノシル

ヘク我コヒメヤモ 一すんにみてりとすへし也)、など口すさひたまへる御こゑは、猶たくひなし。

ところが、狭衣物語抄を参照すると、「音羽の山には」を見せ消ちにして注を付さず、「一すんにみてり」と傍書し、本文を修正しながら注も改めていることが明らかになる。

音羽の山にはなと山しなの音羽の山の番にたに人のしるもくわかよひめやも(一すんにみてり 菖蒲之古句ニ蕭然一寸碧 細葉非無地 千根初絡石 根盤龍骨瘦 花開香細亡一寸にみとりをみてりとかきあやまれる歟、又此句ヲ一寸にみてりと吟しかへ給歟)

兼寿書き入れ本から狭衣物語抄にまとめなおす際、おそらくは判断を留保していた「音羽の山には」を捨て、「一すんにみてり」を適切と解したのであろう。本文を改めることに柔軟な姿勢が指摘できる。

それでは、「なからへて」「きえはてて」歌の場面はどうなっているであろうか。兼寿書き入れ本から見てもことにしたい。

をくれしとちきらさりせは今とはとそむくも何か、なしからまし

「一本、又うせ給けんとしての給ちかうなりてなるへし、

なからへてあらはあふせを待へきに命はつきぬ人は問こ  
す

消はて、けふりは空にかすむとも雲のけしきを我としら  
なん」

とあるを、

兼寿書き入れ本では、「なからへて」「きえはてて」歌を欠く本  
文に、「一本」としてこの二首が補われていることが分かる。兼  
寿は、「なからへて」「きえはてて」の二首の存在を確かに知つて  
はいた。ところが、狭衣物語抄としてまとめられる際には、これを反  
映させていないどころか、注として触れることさえもしていない。  
前述した「音羽の山には」を「一すんにみてり」と修正して注  
釈を記載しなおした態度とは、全く異なっているのである。紹  
巴のみならず、兼寿もまた、二首を有する本文の存在を知りなが  
らも、二首を欠く本文を許容していたといえる。

このように見ると、紹巴や兼寿は「なからへて」「きえは  
てて」の二首が削除された本文を読むべきものとして受容してい  
たと見なすことができ、二首を欠く本文とする相応の理由を積極  
的に考えてみなければならぬように思われる。

前掲一文字氏論考から、当該場面についての解釈を引く。

一方、古活字本でこの二首がないのは、脱漏との見解があ  
る。(中略)仮にこの二首がなくても、文意が損なわれるこ

とはないが、この直後に狭衣帝が「…とあるを中将かちかく  
てきくらんあまり心よはきやうなりとおほしつゝ、めとなく  
よりほかのことなし」(伝為明筆本)とあつて、その悲嘆さ  
を盛り上げていくには(出家↓命が尽きる↓消えはてても)  
という段階を踏むのが自然である。また、続く狭衣帝の歌  
「かすめよなおもひきえけんけふりにもたちおかれてはくゆ  
らざらまし」が、「きえはて、」の歌に対応していることを  
考えると、現時点ではこの歌を欠く本文が古活字本・整板本  
だけなので、脱漏の可能性は大きい。あるいは故意に省略し  
たとも考えられる。

誤りか省略かの判断を保留にしながらも、「悲嘆さを盛り  
上げていく」ために、「をくれじと」と出家の心情を訴え、「な  
からへて」歌で命が尽きることを示し、「きえはてて」歌で死後の  
悲しみまでも語られることの必然性を説いている。しかし、徐々  
に段階をふむという解釈は、ともすれば冗漫とも捉えられ、必ず  
しも誤脱と判断する根拠にはなりにくい。従つて、問題は、先  
とり上げた巻三の「なき人の」歌、そして、直後に続く「かすめ  
よな」歌とのかかわりに絞られてこよう。

前者について、狭衣が詠んだ「なき人の」歌と飛鳥井女君の  
「きえはてて」歌は互いに響きあつており、物語が意図的に生じ  
させた一致と考えられる。しかし、はからずも一致した二首が物  
語の展開に重要な役割をはたしているとはいえず、この相似を示

さなければならぬという確証はえがたい。

一方、後者はどうか。狭衣が詠んだ一首目の「かすめよな」歌は、飛鳥井女君が詠んだ二首目の「さえはてて」歌の返歌になっている。飛鳥井女君の一首目の「なからへて」歌と狭衣の二首目の「おちたさる」歌は贈答を形成しておらず、両者の詠んだ二首がともに贈答となっていないことに不審は感じられるものの、「さえはてて」「かすめよな」の一对の贈答を削除してまで二首を描かない意図は奈辺にあつたのか。そして、なによりも、死の間際で詠まれた二首を欠くことによつて、死に対して無言であつた飛鳥井女君の姿が浮かび上がることはどう捉えるべきであらうか。

ただ、飛鳥井女君が絵日記を残し、出家に際しての和歌を詠んでいることは二首の有無にかかわらず共通する。問題の所在は飛鳥井女君の造型よりも、狭衣にかかわるように思われる。すなわふねにても、やかてひきかつかきて、みちのま、になきこかれて、ちかうもよせて、心きようて、ほいなく侍しかと、見侍しかたち、寺などにて見侍しよりもなつかしうはへりしかは、ゐてもかへらて、いまざりともおもひなくさめて、と思給ふて、よろつにいひなくさめつ、あなかちにおもひいるさまのけしきをも、心くるしうて、のとかにすこし侍しを、ゆ水をたに見いれず。日をへてなきしつみまさりて、さらにいくへうも見え侍らさりしかは、えまかりもやらて、しも月のつこもりまでひせんにまかり

ち、贈答として詠むのではなく、飛鳥井女君の和歌がない状況のもとであつても、自ら和歌を詠まざるをえない狭衣の姿を捉えてみたいのである。紹巴校訂後の本文をもつ元齋本や承応三年版本において、狭衣の詠歌には「など」が連接しているのに対して、飛鳥井女君が詠んだ「をくれじと」歌には「と」が連接していることも、とり上げておかなければなるまい。絵日記でも多くを語らない飛鳥井女君像は、対照的に、いくらことばを尽くしても語りきれないほどに悲しむ狭衣像を表出させるのである。

狭衣が飛鳥井女君との別れを痛切に感じるさまは、筋書きだけにしようとする姿勢が指摘される流布本においても一貫して描かれるところを挙げよう。上段に内閣文庫本、下段に承応三年版本を示す。

みちすがらなきこがれ、こゝろづよくちかうもよせず、かぎりのさまに成にししかば、心のどかにおもひ給ひて、よりもつかず、打たゆみて侍りし程に、

と、まりて、よるひるまほり侍しに、  
 からとまりと申ところに、大弐のふねにあからさまにまかりて侍  
 しまに、きえうせにしありさま、うみにおちいりにし、と人のな  
 ん見給へし。

御あふぎをとらせて侍しかは、いかにおもひ侍けるにか。しかく  
 なんかきけかして侍し。いかにおもひけるにか。たゞにも侍ら  
 て、な、月はかりになり侍けるは、なにかしの少将のにてやはへ  
 りけん。

その君たちにかげられたらむよりは、とおもひ給へりしかと、い  
 といみしうなきこかれて、いのちにもかへ侍しも、いかはかり思  
 けり。なにかしの少将は、いかにかおもひて侍るらん、

といふ。さてはまことなりけり、とおほすに、けしきかはらむ、  
 とおほゆまていみしきを、つれなくもてなし給て、

おほろけならす心ふか、りける人かな。かへりてはうとましようこ  
 そおほゆれ、などことすくなにていり給ぬ。

下段の承応三年版本では、道成の行動や心情が悉く省略されて  
 飛鳥井女君へと焦点が当てられている。余計な叙述を省きながら  
 も、飛鳥井女君の描写だけは残し、道成の話を聞き終わった後の  
 狭衣の「ことずくなにて入給ひぬ」様子を際立たせている。もち  
 ろん、掲出した箇所は、流布本のみ独自の異文ではなく、流布

からとまりと申す所にてきえうせにしありさま、海におちいりた  
 る、となん見給ひし。

あふぎをとらせてなんざぶらひしに、しかくなんけがしてさぶ  
 らひし。いかに思ひけるにか。たゞにも侍らて、七月八月計に侍  
 りけるは、なにかしの少将にや侍りけん、

と語るをき、給ふに、さはまこと也けり、とおほすに、けしきも  
 かはらんかしと覚ゆるまで、いみじく覚ゆれど、つれなくもて  
 なし給ひて、

げに、おほけなくこ、ろふか、りける人かな。かへりてはうとま  
 しきまでこそおほゆれ、などことすくなにて入給ひぬ。

(参考 大系一七九頁―一八〇頁・集成上二〇八頁―二〇九頁)

本成立以前に書写された、流布本のもととなったであろういくつ  
 かの伝本にも共通の本文であって、紹巴の意図した校訂として読  
 みとることはできない。しかしながら、紹巴が飛鳥井女君との別  
 離による狭衣の苦しみを鮮明に描こうとする本文に基づきなが  
 ら、本文を校訂し、作成していったことは確かなのである。

こうした本文から表出してくる狭衣像に沿いながら、紹巴は、飛鳥井女君の心情を語るよりも、狭衣が語りきれないほどの悲嘆を背負っていたことを物語の結末に描いたといえる。「かすめよな」「おちたきる」歌が詠まれた後、狭衣は絵日記を漉き返して経を書き、飛鳥井女君が亡くなった常盤をすべて寺にしてまで供養をするが、狭衣の悲しみが強調されることによって、後続する本文への接続も自然なものとなろう。

もつとも、内閣文庫本などにおいては、入水を選ばざるをえなかった飛鳥井女君は絵日記にすぎび書きをして心を慰めながら、そして、物語の結末部分において、時を隔てた贈答がようやく成立することで狭衣と通じている。二首を欠く本文では、飛鳥井女君と狭衣は通じないままとも読みとれる。和歌による贈答が成立したことに重きをおけば、二首を欠く本文の解釈は不適である。しかし、紹巴が選択した本文に兼寿も従ったように、連歌師たちにとって、二首を欠いた本文こそが読まれるべきものであったことに違いはない。

## 五 おわりに

本稿では、「なからへて」「きえはてて」歌の場面を対象に、これら二首を有する内閣文庫本をとり上げ、二首の順序を逆にする九条家旧蔵本、そして、二首を欠く承応三年版本に言及してきた。そのいずれであっても、明確に誤りと判断できる本文は存在

しないと考える。

二首を有する本文であれば、飛鳥井女君詠「きえはてて」歌と狭衣詠「かすめよな」歌の贈答が成立し、飛鳥井女君の物語を終えていると読み解ける。あえて贈答をくずさなければならぬ理由は見いだせない。一方、二首の順序を逆にする本文が誤りであるかについては、和歌の内容からは違和感があるものの、書写者や享受者の問題をとり払い、現在の理論によって優劣を決することの問題を指摘した。つまり、たとえ二首の順が相違しようと、誤りと判断せずに読むことは十分に可能なのである。二首を欠く本文を考察した際には、紹巴の所持していた諸本に分け入ることによって、紹巴が二首の存在を知りながらも、あえて、二首を欠いた本文に校訂したと推測した。紹巴の意図は、二首を残して狭衣と飛鳥井女君の贈答を成立させることであつたのではない。そうすることによって、死への痛烈な嘆きを詠み続ける狭衣の姿を表出させ、飛鳥井女君の物語を結末に導こうとしたのである。狭衣物語抄や兼寿書き入れ本との比較から、兼寿が二首を有する本文を校合に用いているながらも、二首を欠く本文を採用したことも明らかにした。紹巴以後、二首を欠いた本文が書かれ、読まれ続けてきたことを重く受けとめておくべきであろう。

以上、三通りの本文をとり上げてきたが、狭衣物語の多彩な異文はこれにとどまらない。最後に、伝為定筆本における様相を示しておく。

又あまになり給けるに、いひ契給し事ともまつ思いてられて、いみしくなき給所に、

なからへてあらはあふよをまつへきにいのちはつきぬ人はとひこす

きえはて、けふりはそらにかすむともくものけしきを我としらしな

とあるを御らんしはつるま、に、さくりもよ、と、みたりかはしき涙のけしき、中将かちかくてきくらん事も、あまり心よはくやおほしつ、めと、た、なきにと、めかね給さまことなりなり。

かすめよな思きえなんけふりにもたちおくれてはくゆらさらまし

おちたきる涙のみをははやけれどすきにしかたにかへりやはする

なとかきつけさせ給て、返／＼かひなうおほしめさる、事かきりなし。

内閣文庫本や九条家旧蔵本、承応三年版本のいずれとも異なつて、伝為定筆本では、「をくれしと」歌とそれに続く「うせ給はんと」の部分がない。冒頭、「あまになり給けるにいひ契給し事ともまつ思いてられて」とあり、出家の折の和歌が詠まれる場面であるにもかかわらず、唐突に死の直前に詠まれた和歌が描かれているのだから、矛盾がないとはいいい切れない。しかし、だから

といつてただちに誤りと判断するのではなく、これまで検討してきたように、まずは異文が発生した要因を考えておくべきではないか。他本では、「をくれしと」歌のすぐ後に「なからへて」「きえはてて」歌が結ばれ、そして、狭衣の返歌に続いているのである。飛鳥井女君の「をくれしと」歌、あるいは出家に対する狭衣の反応は描かれない。伝為定筆本は、こうした叙述を改変し、出家をめぐる場面に流れず、飛鳥井女君の死そのものに対する狭衣の悲嘆を表していると読むことはできないか。結果として矛盾した本文が形成されてしまっただけのことであり、伝為定筆本の意図を考えることが求められているのである。

本稿で一貫して指摘してきたことは、諸本に書かれた本文に疑問がある場合、それを誤りとする以前に、意図してなされたものと考えるべきであるということである。異同の生じている箇所に対して、特定の本文に優劣を付けることや、一方を誤りと断じてしまうことは比較的容易なことであるように思う。しかしながら、こうした異文の存在こそ、狭衣物語がどう読まれてきたか、その受容の様相を知ることのできる重要な要素になることは疑いようがない。そしてまた、揺れ動く本文の姿を把握することによってこそ、狭衣物語を読み解いていくことにも通じるのである。諸本における異文を追いながら、飛鳥井女君詠二首をめぐる読みのある方を提示しえたのではないか。

注

(1) 内閣文庫本は国文学研究資料館所蔵のマイクロフィルムに依り、引用に際しては、漢字・仮名の別は本のままとし、通読の便を考えて私に句読点を施す。

狭衣物語本文の引用に際しては、参考として、文末の( )内に、内閣文庫本を底本とする三谷榮一氏・関根慶子氏校注『日本古典文学大系79 狭衣物語』(岩波書店、一九六五年)および、旧東京教育大学国語国文学研究室蔵本を底本とする鈴木一雄氏校注『新潮日本古典集成 狭衣物語(上―下)』(新潮社、一九八五年―一九八六年)の頁数を示す。なお、引用本文がこれら活字本の底本と異なる場合もあり、おおよその頁数になることがある。以下同じ。

(2) 三谷榮一氏の諸本分類に関しては、同氏『狭衣物語の研究(伝本系統論編)』(笠間書院、二〇〇〇年)など参照。

(3) 三谷榮一氏『九条家旧蔵本狭衣物語と研究(上―下)』(未刊国文資料刊行会、一九六〇年―一九六三年)に依る。なお、伝為秀筆本との校異は( )にして示す。以下同じ。

(4) 吉田幸一氏『狭衣物語 蓮空本(巻一・二―四)』(古典文庫、一九五五年)に依る。

(5) 三谷榮一氏『平安朝物語板本叢書 狭衣物語(上―

下)』(有精堂、一九八六年)に依り、引用に際しては、漢字・仮名の別は本のままとし、通読の便を考えて私に句読点を施す。

(6) 中城さと子氏『流布本狭衣物語と下紐の研究』(新典社、二〇〇三年)および、川崎佐知子氏『狭衣物語』享学史論究』(思文閣出版、二〇一〇年)など。

(7) 三谷榮一氏・関根慶子氏校注『日本古典文学大系79 狭衣物語』(岩波書店、一九六五年)

(8) 小町谷照彦氏・後藤祥子氏校注『新編日本古典文学全集(29―30) 狭衣物語(①―②)』(小学館、一九九九年―二〇〇一年)

(9) 『論叢狭衣物語4 本文の様相』(新典社、二〇〇三年)

(10) たとえば、伝慈鎮筆本には「うきみにはあきそしられしおきはらやすこすかせのおとならねとも」(吉田幸一氏『狭衣物語諸本集成3』笠間書院、一九九五年)、九大細川本には「うき身には秋そしられしをきはらや末こす風のおとならねとも」(九州大学附属図書館日本古典籍画像データベースに依る)などである。

(11) 松村博司氏・石川徹氏校注『日本古典全書 狭衣物語(上―下)』(朝日新聞社、一九六五年―一九六七年)

(12) 『論集 源氏物語とその前後5』(新典社、一九九四年)

(13) 注(6)に同じ。同氏『十二冊本『狭衣物語』について』(『名古屋平安文学研究会会報』三十三、二〇〇九年十

月)でも、紹巴が「手を加えて」、二首の「削除」を行つたとする。

(14) 原本に依り、引用に際しては、漢字・仮名の別は本のままとし、通読の便を考えて私に句読点などを施す。紹巴による加証奥書に「此狭衣物語全部四帖元齋寿三借予本書写畢外題所望之次加奥者也 天正廿年桃花之節後 法橋紹巴(花押)」とあり、次いで、元齋による識語も付されている。

他に、寛佐が昌俣本を書写して昌琢本と校合したものと考えられる一本(『実践女子大学文芸資料研究所電子叢書 I 物語史研究の方法と展望』実践女子大学文芸資料研究所、一九九九年)なども、同様に二首を欠いている。

(15) 『実践女子大学文芸資料研究所電子叢書 I 物語史研究の方法と展望』(注14)に依り、引用に際しては、漢字・仮名の別は本のままとし、通読の便を考えて私に句読点などを施す。物語本文に識語はないが、同筆、同装であわせて伝わる狭衣下紐の識語に「此狭衣抄二冊臨江齋紹巴被注之依許可書写之畢 天正廿年三月日 中臣祐範」とあり、物語本文も、狭衣下紐と同じく、祐範が紹巴本を書写したものと思われる。

他に、押小路本も、狭衣下紐から宗具が紹巴より伝えられたことが判明する一本であり、同様に二首を有している。両者ともに紹巴とかかわりのある伝本であることは、

上野英子氏「紹巴所持本狭衣物語と『下紐』をめぐる考察——巻一を中心に——」(『論叢狭衣物語4 本文の様相』新典社、二〇〇三年)などに指摘があり、両者が兄弟本であるとの見解が中城さと子氏「流布本狭衣物語と下紐の研究」第一章第一節「『狭衣物語』の諸本の収集と『下紐』の著述」(注6・二本の紹巴奥書本『狭衣物語』と『下紐』の検討—寛佐奥書本『狭衣物語』にもよぶ—)(『中京大学教養論叢』四十一—、二〇〇〇年十月)に見える。

(16) 川崎佐知子氏『狭衣物語』享受史論究』第三章第二節『狭衣物語抄』の関連資料」(注6・「猪苗代兼寿『狭衣物語抄』の関連資料」(『詞林』三十一、二〇〇二年四月))

(17) なお、「音羽の山には」は諸本間の異同が多く見られるところで、たとえば、内閣文庫本は「みくりや」(参考大系四十一頁)とする。三谷榮一氏「九条家旧蔵本狭衣物語と研究(上—下)」(注3)、井上眞弓氏「狭衣物語の語りと引用」第四章「みくりや」をめぐる引歌事情」(笠間書院、二〇〇五年)など参照。

(18) 原本に依り、引用に際しては、漢字・仮名の別は本のままとし、通読の便を考えて私に句読点などを施す。以下同じ。

(19) 川崎佐知子氏『狭衣物語』享受史論究』「翻刻・宮城県図書館伊達文庫蔵『狭衣物語抄』」(注6)に依る。

(20) 紹巴の校訂を経た流布本であっても、他本と比して、

飛鳥井女君の造型が著しく異なることはない。飛鳥井女君は多くを語らない。飛鳥井女君を謀って道成の求婚に応じようとする乳母の企てに不安を感じながらも、乳母の饒舌に反論できず、筑紫へ下ることになってしまう。懐妊したことさえも狭衣に伝えることもない。入水譚に象徴的なように、多くを語らずにさび書きせざるをえない女君であることに相違はない。しかし、流布本における飛鳥井女君の造型は、他本におけるそれとは、当然、異なりも見いだされる。紹巴による校訂の全体像とともに、本稿とは別に考えるべき問題である。

(21) 吉田幸一氏『深川本狭衣とその研究』（私家版「古典聚英」別冊、古典文庫、一九八二年）に依り、引用に際しては、漢字・仮名の別は本のままとし、通読の便を考えて私に句読点を施す。

(22) 諸本に見られる異文をさらに掲げておけば、たとえば、逸翁美術館蔵本では「うせ給はんと」の部分のみを欠き、飛鳥井女君の詠歌三首を併記するかたちになっている。

(23) 片岡利博氏『物語文学の本文と構造』（和泉書院、一九七七年）や久下裕利氏『狭衣物語』の異文と受容の間』（狭衣物語の視界）新典社、一九九四年）なども、同様の視座から諸本間の異同を読み解こうとする。

(24) 物語を本文異同や受容を含めた総称として捉えようとする視点については、加藤昌嘉氏『揺れ動く『源氏物語』

（勉誠出版、二〇一一年）所載の一連の論考を参照された  
い。

（すどう・けい 本学博士後期課程／日本学術振興会特別研究員）